

夫婦百景

獅子文六

夫 婦 百 景

獅 子 文 六



景百婦夫

昭和三十三年十一月二十日 発行
昭和三十三年十二月十八日 三刷

定価二二〇円
地方
売価二四〇円

著者 獅子文六

発行者 佐藤亮一
東京都新宿区矢来町七十一

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七十一
電話(34)七一〇一
振替東京八〇八番

乱丁本は本社又はお買求めの書店でおとりかえます。

目

次

夫婦論……………七

○美男と美女の夫婦……………一〇

○強情妻……………二〇

○ある恋愛結婚の夫婦……………三〇

○関白亭主とその妻……………四〇

○失格女房とその良人……………五〇

○中間夫婦……………六〇

☆

○母親女房……………七〇

○もう一人の母親女房……………八〇

アベコベ夫婦……………九

○ 学生夫婦……………二三

惜春女房……………二七

トの字の夫婦……………二四

三十二年目の復縁……………一五

○ 天使夫婦……………一六

若い、若い夫婦……………一八

○ 非夫婦・夫婦……………一六

あとがき……………二〇

裝
幀

西
山

秀
雄

夫
婦
百
景

夫婦論



どうも、結婚のむつかしい世の中になった。

女の数が多く、男が少い。そして、少い男のうちで、一家を支えていくだけの能力を持つ男が、さらに少い。男が意気地がなくなつたというよりも、それだけ生活が苦しくなつたのである。

これだけでも、結婚難時代といえる。

ところが、搗かてて加えて、結婚をむつかしく考えさせるものがある。それは、結婚や恋愛や性に対する思想の動揺である。過去の道徳や習慣は崩壊し、新しきものは少しも築かれていない。

この混乱の中にあつて、いかなる男を選び、いかなる女を信頼すべきか、どんな夫婦生活が正しいのか、幸福なのか、ハッキリわからなくなつてきた。

これは、空前の結婚難時代である。こんなに結婚ということが、むつかしくなつたのは、日本始まつて以来にちがいない。しかも、その脅威は、未婚者だけに止まらない。既に良人を持ち、妻を持った者も、この時代の大濤おきなみを免れることはできない。うら若い娘たちが、青年よりも妻子ある中年男の方を選ぶなぞという、ヘンな流行が始まつてみると、細君たるもの少しも油断はで

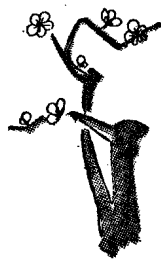
きない。教養もあり、子供もある妻が、平然と家を捨てて他の男に走る例が、度々、新聞を賑わすと、良人も枕を高くして寝られないのである。それまでの脅威を感じないにしても、大多数の家庭は、物質的に疲れ切つてゐる。良人は精一杯働いてゐるのに、ヤミ商人の半分の収入もない。妻は食糧と被服のヤリクリに悩み、配給物の運搬だけでも、ヘトヘトに息を切らせてゐる。人生は味気なく、夫婦生活そのものに懷疑の眼を向けたくなる。愛する良人も、無能で、横暴で、やりきれない男に、見えてくる。

たしかに、これは危機である。日本の男女が、歴史的な受難期を迎えたのである。大戦争があり、その打撃の強かつた国は、大体、これに似た状態が起るものらしい。しかし、戦争がなければ、日本のアダムとイヴが樂園を追われなかつたかといへば、そうも限らない。結婚生活というのは、地球の回転と共に、日に日にむつかしく、苦しくなっていくものである。というよりも、結婚は、元来、生優しいものではない。アカの他人同士が完全に結ばれるのは、容易なことではない。われわれの夫婦生活を顧みて見ても、いい時はいいが、悪い時は始末にいかぬものなのである。たいていの夫婦が、その悪い時を、目を瞑こらつたり、ゴマかしたりして、暮してゐるのである。夫婦生活の眞の勝利者、成功者というものが、古来、幾組あるだろうか。尤も、甚しい失敗者というものも、そう多くはない。これは、自然がある程度まで、人間の夫婦を導いてくれるからで、問題はそれから先きに起つてくる。いい換えれば、生殖関係のみに甘んずる夫婦関係なら容易であるが、愛とか、融合とかを求めずにいられない進歩した夫婦ほど、むつかしく、苦しい目に逢うのである。日本の男女、夫婦も、戦前よりも進歩したから、受難を迎えたともいえるの

である。

とにかく、夫婦は厄介なものである。私は、どうしたら夫婦がうまくいくのか、どんな夫婦が幸福であるのか、そんなことを人に教える資格も、能力も、まるで持っていない。私自身が迷っているのである。ただ私は生涯のうちに、いろいろな夫婦を見てきた。いろいろの夫婦の写真の映画が、私の心に遺っている。私はそれをそのまま、読者に提供してみたい。なぜかというところ、こういう混乱の時代には、各自が自分の眼で見、自分の心で感じ、そして自分の考えを持つということが、一番大切ではないかと、思われるからである。くれぐれも申したいのは、これから述べる話は、教訓的でも、また、興味中心でもないことである。それは、いろいろの夫婦の写真帖に過ぎない。黄色く色褪^あせた、古い写真もある。昨日貼りつけたばかりの、新しい写真もある。とにかく、数が多いので、手当り次第に、アルバムを開けてみる外はない。

美男と美女の夫婦



山田（仮名）夫婦が結婚した時には、どんなツムジ曲りの人間も、悪口がいえなかった。好一對ということ、絵に描いたようだったからである。

二人は、まず容貌の点から、そういう感じを、人に起させた。美男子と美人——誰の眼にも、二人の美貌は水準を抜いていた。

「まア、お雛様を列べたよう……」。

キマリ文句ではあるが、女達は異口同音に、そういった。

しかも、この新夫婦の美貌は、人に反感を起させるような性質のものではなかった。良人のA太郎は、美男子ではあるが、色も浅黒く、イヤ味の無い、上品で、鷹揚な顔立ちだった。役者なぞより、華族の息子に近い印象を与えた。体つきも、デブブリした感じで、柔弱なところは、少しもなかった。

細君のB子は、なにか、莖の細い花のような、美しさを持っていた。色が白く、顔の輪郭は正しい卵形で、隆い鼻も優しみがあつた、ことに口許が可愛らしかった。あんな小さな唇を、めった

に女性は持っていない。彼女の顔立ちも、体つきも、万事が小柄で、キャシャであつたが、虚弱の暗い影はなかつた。

というのも、彼女は、東京のある進歩的な商人の三女に生れ、幸福な娘時代を送り、体も心も健やかに育つたからである。明治時代のことで、彼女は築地の米人学校に、洋服を着て通わせられるかと思うと、午後は千字文の習字だとか、長唄の稽古に行ったりした。

彼女は、快活で、無邪気な娘だつた。ただ、父の商人の血を享けて、頭はかなり明晰めいせきで、弁舌が立つて、幼女時代にオマセだといわれたところが、残っていた。しかし、それは寧ろ、彼女の愛嬌あけがらと思われていた。彼女は、十八歳で、山田家に嫁よめいだので、世の中のことは、まるで知らなかつた。

良人の A 太郎は、二十八で結婚したのであるが、当時は、世間でハベのきいた、東大出の医学士だつた。結婚すると、彼は、直ちに、父の業を継いだ。父も蘭方の医師で、名ある人であつた。日本橋のある町に開業していて、よい患家の数も、多かつた。彼は、息子に医院を譲ると、自分たち夫婦は、湘南に隠退した。

新家庭の出発は、まことに順潮で、幸福だつたといわねばならない。姑も、舅も側にいるわけではなく、患者つきの医院をソックリ譲られたので、生活の苦労はなく、女中二人、薬局生二人、通勤の代診一人の外には、まったく水入らずの夫婦だつた。尤も、A 太郎の祖母が、湘南へ行くのを好まないのので、新家庭に留とどまっていたが、江戸育ちの優しい婦人で、老齢でもあり、義祖母というものは、姑のように嫁よめいじ苛めをせぬものであるから、B 子は幸福だつた。むしろ、B 子の世

間知らずを愛し孫娘のように甘えさしていたほどである。

A 太郎は、若先生の名で通り、その医学の新知識と、坊ちゃんらしい鷹揚さで、患者の受けもよく、医院は、旧よりも繁昌したほどだった。午前は診察室で、来診の患者に接し、午後は、父の代から車を曳いてる抱えの人力車に乗って、往診に廻った。日暮れに帰ってくると、一風呂浴びて、ビールを飲んだ。彼は、大学時代に、ボートの選手をしていたこともあり、学生時代から酒を好んだ。日本酒も飲むが、ビールが好きで、興に乗ると、一ダースぐらいを明けることがあった。陽気なことが好きで、日曜の休診日などには、新妻や祖母を連れて、飛鳥山に花見に行くとか、堀切へ菖蒲を見に行くとか、そして、帰りには、名ある料亭へ寄って、晩食を食うことが好きだった。その時代は、大学を出れば、立派な社会人であるから、鼻下に八字髭を蓄え、現在の三十前後の男とは比較にならぬ、大人振りであった。

この幸福な夫婦は、やがて、玉のような男子を挙げた。オマケなしに、玉のような赤ン坊で、大体、母親似の線の細い顔立ちで、色が白く、鼻がツンと隆く、ただ、眉の揚つてるところは、A 太郎にソックリだった。

「なんて、可愛い赤チャンでしょう。女のお子さんだったら、どんな美人に……」

誰でも、その赤ン坊を見ると、そういうことを云った。美男と美人の子供が、案外、美しい場合もあるが、山田夫婦の子供は、算術の答のように、両親の特長を兼ねた顔を持っていた。

しかし、それから三年経っても、五年経っても、次ぎの子が生れなかった。その理由は、よくわからないが、その男の子が生れる時に、B 子の産後の肥立ちがよくなかったのは、事実であ

る。産褥を離れるようになって、彼女の顔色は冴えず、快活な性格が、どこか翳^{かげ}がさしてきた。後から考えると、これが幸福過ぎた山田夫婦を、最初に襲った雨雲だった。

妻の不健康ということは、家庭を暗くする大きな原因である。病氣は人間の責任でなく、まして、B子の場合なぞは、良人の学生時代の放蕩が、原因しているのではなかったかと思われ、同情すべき点が多いのであるが、とにかく、山田の家庭は、以前ほどの明るさを失ってきた。A太郎が、友人なぞと料亭に出かけ、帰りが晚くなることも時々あった。

しかし、彼が妻に愛を失った様子は、少しも見えなかった。彼の性格は、神経的にコセコセしたところがなく、また、やかましく妻を罵るという点もなかった。周囲に対するように、妻に対しても、紳士的だった。ただ、多少、我儘なところがあり、家の中が暗いと感じれば、すぐ気分直しに、料亭へ出かけたなりした。

B子は、その頃、まだ嫉妬^{しとど}を知らなかった。封建風の色濃く残ってる時代だから、良人が茶屋遊びをすることなぞ、世間普通の習慣だと考えていた。ただ、時として、寂しさに襲われると、一人息子のC一を溺愛することで、すべてを忘れた。

C一は、学齢に達したので、九段の暁星小学校へ入れられた。当時、東京で最優秀の小学校といわれた一つだった。附近の小学校へ入れなかったのも、B子が特別の愛情をわが子に注いでいたからである。C一はフランス人の教師に賞められるほど、学校の成績がよかった。世間の男の子のように乱暴なところが少しもなく、むしろ大人染みた、利発な子供だった。B子の乳が不良だったので、乳母を抱えたが、その乳母がC一が小学校へ通う頃になっても、まだ雇われてい

た。祖母と、母と、乳母とに囲まれた彼は、どこか女の子のような感じで、育てられた。全然、野性のない子供で、じきに風邪をひいたり、腹を悪くしたりした。

B子は、良人の態度はどうであれ、息子の愛育に全心を注ぎ、幸福を感じていた。ところが、C一が十二歳の時に、風邪をこじらせて、熱が下らなかった。遂に、軽い肋膜炎と、父親が診断を下す日がきた。

湘南の両親の許に、C一を転地さす話もあったが、B子は息子を手放すに忍びず、またC一の容態も、是非転地の必要を認めるというほどでもなかった。C一は、ただ通学を休み、二階の一室で、寝たり起きたりしていた。

ところが、一日、C一は烈しい頭痛を訴えた。温和な子が、声を立てて、床を転げ廻るほど、ひどい苦痛だった。その苦痛の絶頂で、C一は、この世を去った。結核性の脳膜炎だったのである。

この打撃は、B子の性格を、まったく一変してしまった。彼女は、陰気な、疑い深い、私の強い女になってきた。そして、息子に注いでいた烈しい愛情の流れが、目的を失って、今度は良人に対する、灼くような猜疑さいぎに変わってきた。

もとより、A太郎も、深く亡児を愛していた。B子に劣らず愛児の死を悲しんだ。共通する悲哀は、一時、夫婦の仲を、新婚当時のように密着させたのである。しかし、A太郎には医業という事業しぎょうがあり、また、自分が再び子供をつくり得る能力があることも、知っていた。そして、B子が要求するように、いつもメソメソと、繰り言の相手となっていることは、退屈で、不